

2023 年度入学生への祝辞

みなさま、ご入学誠にありがとうございます。本日ここにおられる皆さま方のこれまでのご努力、そして皆さまを励まし、支えてくださったご家族・保護者のみなさま方にもお祝いと感謝の気持ちを、都市科学部教職員を代表してお伝えいたします。誠にありがとうございます。

本日、273名の方が都市科学部生になりました。「都市社会共生学科」76名、「建築学科」78名、「都市基盤学科」58名、「環境リスク共生学科」61名です。

都市科学部は2017年に生まれた学部であり、皆様は7期生になります。都市科学部は、都市に関わることを4つの学科で、時には学科を横断して学ぶ、非常にユニークな学部であります。フィールド実践や演習にも重きを置いており、海外での学びのチャンスもあります。

本日は皆様に2つのことをお伝えいたします。

第一に複眼的思考を獲得して頂きたということです。

ドイツの社会学者ウルリッヘ・ベックは、近代化が作り出した自然破壊や人間破壊などにより私たちは「リスク社会」の中で生きていることを指摘しています。人間の活動は、あらゆる環境を劇的に変化させていることも事実です。もちろん人間が行う様々な活動、開発事業などは、良い面も悪い面も沢山あるわけです。

本学部ではこのような二項対立の考え方から一旦脱却し、相対化する力、複眼的に社会を見る力を養っていただきたいと思いますと考えております。一見、対立軸に見える双方の、あるいは複数ある「もののみかた」を理解することから、違う局面が見えることがあります。文化人類学者であり経済ジャーナリストのジリアン・テットはアンソロ・ビジョン、すなわち人類学的モノの見方の大切さを主張しています。みなさまにはまず、他者を理解する、他者の視点から物事を捉える力を養っていただき、複眼的に物事を見る力を獲得して下さい。

第二に自分の専門と他の専門を接合する力を養っていただきたいと思いますということです。ここでは、災害を事例にお話をいたします。

2023年は、関東大震災発生から100年に当たる節目の年であります。震源地が神奈川県であったことから横浜国立大学が開催場所となり、「第8回防災推進国民大会」が行われます。

これからの防災・減災には、多くの専門知が入り、分析されることが大切です。今から12年前に起きた東日本大震災では、人的被害は男性よりも女性の方が大きいことを東京大学名誉教授の大沢真理らは指摘しています。また、女性の経済的・社会的権利の保障が低い社会程、災害被害の男女格差が大きいことも明らかになっています。

皆様が生まれた2005年に米国を襲ったハリケーン「カトリーナ」についての研究では、貧困層、女性、マイノリティは最も脆弱な低地に住んでおり、堤防が決壊し、洪水が街に流れ込んできたときに壊滅的な被害を受けたそうです。また、マスメディアや政府機関からの情報が一部の人々に行き届かず、多くの人々の命を奪い、災害の人的・経済的コストが増大した(Darrell M. West and Marion, 2007: 571) ことを政治学者のダレルとマリオンが明らかにしています。

このように災害を取り上げた場合でも、都市社会、建築、都市基盤、環境リスクの学科で学ぶ視点が入らないと甚大な被害を食い止めることはできないことは想像に難くありません。また、今後の災害時の支援には、男性も女性、LGBTQ（性的少数者）の方々も含め、尊厳ある生活が営めるようジェンダーの視点を取り入れることが不可欠であると考えられています。

ここでは災害を事例にしましたが、自分の専門に加え、他の専門をつなぐ力、学際的に分析する力を養っていくことがとても大切です。

国連サミットで採択されたSDGsは、2030年までに達成することは困難であると言われていています。気候変動や自然災害、紛争、感染症などにより目標から大幅に遅れるものがでていくからです。

地球規模の大きな課題、身近にある社会課題、それらは見えにくいものの実は深く社会の深層で繋がっているものが多いです。複雑化した都市の課題を解決するためには、見えない社会構造を見抜き、柔軟な思考とイノベーションを起こす力、価値観の異なる他者とながり、協働できる力が必要です。皆さまにはそれができると確信しています。皆様の本学部での様々な挑戦に大いに期待しております。

本日は誠におめでとうございます。

2023年4月3日 都市科学部長 藤掛洋子